

マカッサル人の山村における文化生態系の動態
—— インドネシア共和国南スラウェシ州における治山プロジェクトの影響 ——

井 上 真*

**Dynamics of Cultural Ecosystems in the Makassar Mountainous Region :
Effect of the Watershed Management Project, South Sulawesi, Indonesia**

Makoto INOUE*

In the mountainous "Gantarang" region inhabited by the Makassar people, the upper classes living at the foot of the palace had monopolized rainfed rice fields and sugar palm communities, while the commoners, who were shifting cultivators, had produced maize on the slopes of the mountains around the upper classes' villages.

From the 1970s, the commoners began to settle down and make colonies on the middle mountain slopes in consequence of strong prohibition of shifting cultivation due to pine plantation projects by the government. As a result, in the late 1980s when the watershed management project was inaugurated in cooperation with JICA, slash-and-burn agriculture and firing for grazing had vanished. Since the implementation of the project, the upper classes have been earning considerable amounts of cash income as wage laborers for the various activities of the project, and the commoners have been diversifying their income sources, stimulated by construction and improvement of the road network.

Organizational aspects of the culture show signs of changes under the influence of the project. The project's effects, however, have not reached the ideological aspects of the culture.

I 課 題

インドネシア共和国南スラウェシ州南部の内陸山間部を流れるマリノ川最上流域（河口からの距離約 80 km）では、日本の国際協力事業団の協力による治山プロジェクト¹⁾が実施されている。プロジェクト開始前、当地域には焼畑跡地の叢林と草地が多く、ところどころにアレンヤシ群落、水田（棚田）、メルクシマツ造林地がモザイク状に分布していた。標高は 700 ～ 1,300

* 東京大学農学部林学科； Faculty of Agriculture, The University of Tokyo, 1-1-1, Yayoi, Bunkyo-ku, Tokyo 113, Japan

1) 筆者は、インドネシア南スラウェシ治山プロジェクト（1988, 7, 21 ～ 1995, 7, 20）へ、プロジェクト地域に適したアグロフォレストリー等を提案することを目的とし、短期専門家（複層林施業分野）として派遣された（1993, 6, 6 ～ 7, 27）。本稿は、その時に作成した報告書 "Economic Condition in the Project Site and Feasible Agroforestry Systems" をさらに展開したものである。尚、本稿の公表に際して国際協力事業団の了承を得た。

m で、山腹面の傾斜が 30 度以上の所が多く、しかも年間雨量が 3,000 mm を超える。そこで、ウジュン・パندان市等への水源地域を適切に管理するための森林保全技術の開発を目的として、プロジェクトが開始されたのである [国際協力事業団 1988: 53-75]。

このプロジェクト対象地すなわちガンタラン (Gantarang) 地域 (図 1) は、行政的にいうとゴア県ティンギ・モンチョン郡のガンタラン村全域 (8 集落) と、マリノ村の一部 (1 集落) からなり、9 集落におよそ 3,000 人が居住している。焼畑農業、水田稲作、牛の放牧により維持されていた人々の生活は、プロジェクトによる雇用機会の創出 (林道建設、小規模砂防ダム建設、造林作業等)、及び造林による焼畑用地の減少によって、多大な影響を受けていると考えられる。

本研究の直接的課題は、ガンタラン地域の「文化生態系」[川喜田 1989: 6-8] の変容プロセスを明確にし、マカッサル山村の文化がどの程度まで自然環境の変化を社会的にとりこんで [掛谷 1994: 3-5] いるかを明らかにすることである。ところで、荻野 [1993] は社会システムと生物システムの相互作用系を「社会生態系」と捉えている。しかし、地域に対するアプローチの枠組みとして援用する場合、文化生態系モデルが文化を重視しているのに対し、社会生態系モデルでは無機環境と生物社会から成る生態環境のウェイトが高い。したがって、社会科学的分析を主体とする研究では、文化生態系アプローチがより有効であると思われる。本稿で文化生態系という用語を使用した理由はここにある。



図 1 ガンタラン地域の位置

次は副次的な課題についてである。マカッサル人の農村社会のモノグラフ的記述はほとんど存在しない〔前田 1982〕。ましてや、内陸山間部であるガンタラン地域の文献は皆無である。そのため、調査に先立ってサーベイすべき文献は極めて限られたものとならざるをえなかった。したがって、必然的に、文化生態系の動態を明らかにする過程で、マカッサル山村のベールを部分的にはあるが剥すことも意図している。

II 方 法

1. アプローチの枠組み

文化生態系の動態を捉える枠組みとして実際に適用できそうなのは、人間と自然環境との相互関係及びその変化を分析する枠組みとして人類生態学者により使用されてきた“Ecological Complex Model”を改良した“Nature-Human-Ideology Interface”である〔Khaleque 1992: 50-72〕。このモデルでは、外部要因がフィールドで観察する単位としての5要因の相互関係に影響を与える図式を想定し、それぞれの要因の相対的重要性は時と場合によって変化するものであるとする点に特徴がある。そして、調査結果の記述に続いて、次に示す5要因（頭文字をとってPETIO）の相互関係とその変容を順に考察するというスタイルをとっている。

その5要因とは、①人口（Population）：人口規模、民族、教育レベル、性別など、②環境（Environment）：自然環境と社会環境、③技術（Technology）：資源利用に必要な知識、情報、技能、技術、道具など、④イデオロギー（Ideology）：資源利用に影響を与える信念、価値、規範、世界観で、土着・外来両方がある、⑤組織（Organization）：制度面、及び社会的・経済的階層などの構造面、である。

このモデルの利点は、フィールド調査の結果を論文という形にする手法が非常に具体的に提示されていることであるが、5要因の相互関係を並列的に把握しており重層的でない。したがって、本稿では文化の4側面が重層的に把握されている川喜田の文化生態系モデルを基本としつつ、外部要因の把握及び論文の構成においてKhalequeの手法を援用する。

文化生態系の動態を表す概念図（図2）において、主体性というのは主体すなわち社会から自然環境へと働く力を意味しており、環境性というのは自然環境から主体（社会）へと働く力を意味している〔掛谷 1994: 9〕。したがって、この概念図に即していうならば、本稿の課題はガンタラン地域における主体性と環境性、すなわち土地利用・資源利用と環境変化による影響、の相互関係を考察することに他ならない。これらの考察は、調査結果の報告に続いて、自然環境、技術、経済、社会組織、価値観の順で行われることになる。

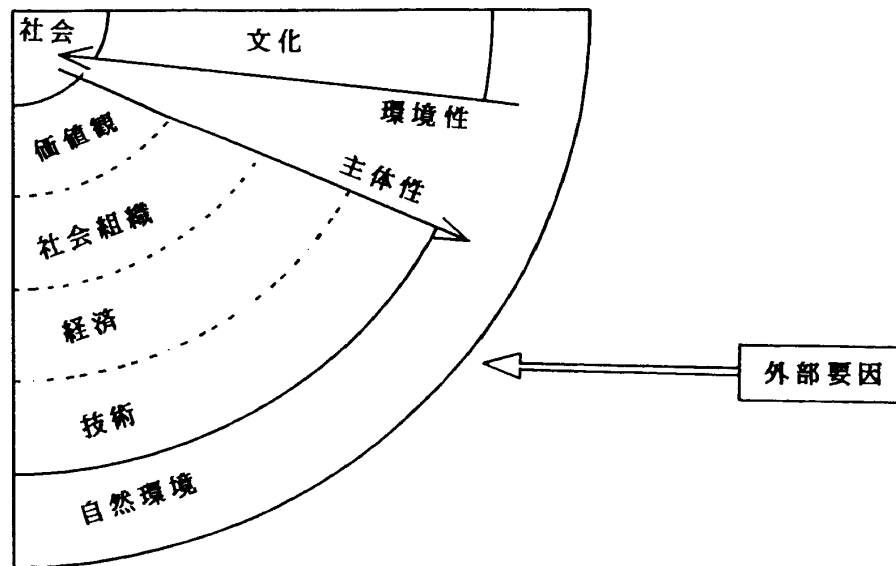


図2 文化生態系の動態モデル

出所：川喜田 [1989] を参考に作成

2. 調査の手順及び内容

聞き取り調査は筆者がインドネシア語で実施したが、インドネシア語とマカッサル語との間の通訳として、適宜、プロジェクトの補助スタッフである Kadir 氏と Basir 氏の助けを借りた。

①予備調査：プロジェクト地域に含まれる全集落（RW：Rukun Warga）の集落長に対する聞き取り調査を行った。同時に、対象地域の景観を把握すべく全体を一通り踏査するなかで、農作業中の人々などに対して任意に聞き取り調査も実施した。尚、人口統計などは、ガンタラン村役場・マリノ村役場、州統計局で入手した。

②調査対象集落の選定：全9集落の中から、経済社会構造の異なると思われる4集落を選定し、比較研究の調査対象とした。

③本調査：調査対象の世帯主全員に集まってもらい、農業、森林、景観、治山プロジェクト、等を話題としたグループインタビューを実施した。その後、世帯主夫婦に対して家族構成や家計に関する戸別の聞き取り調査を行った。

④補足調査：調査票記入の不備が認められたので、補足調査を実施した。

⑤その他：身分制度を含む慣習法に関する正しい情報を得るため、様々な身分の人に対してインフォーマルインタビューを実施した。

3. 調査対象集落の選定

予備調査の結果、ガンタラン地域の人々の収入源として重要なのは、水田稲作、アレン糖生

産、牛の飼育、賃労働であることが把握された。そこで、これら全てが活発で、家の作りからしても所得水準が高いと思われる J 集落、全て中水準と思われる T 集落、そして全て低水準と思われる P 集落を調査対象に選定した。また、治山プロジェクト以外の賃労働機会を得ている人のいる B 集落も調査対象に加えた。そして、それぞれの集落の中で集落の特徴を典型的に表している隣組 (RT: Rukun Tetangga) を選び、無作為に聞き取り調査の対象世帯を選定した。調査対象集落の人口、及び聞き取り調査対象戸数は以下の通りである。

- ・ J 集落 (59 世帯, 228 人) の一隣組: 24 戸 (27 世帯, 108 人) のうち調査対象は 19 戸
- ・ T 集落 (52 世帯, 318 人) の一隣組: 30 戸 (34 世帯, 165 人) のうち調査対象は 20 戸
- ・ P 集落 (29 世帯, 156 人) の一隣組: 18 戸 (21 世帯) の全戸
- ・ B 集落 (78 世帯, 370 人) の一隣組: 22 戸 (25 世帯) のうち調査対象は 17 戸

III 調査結果

1. 現在の行政区分と人口

プロジェクト対象地は、開始時には全てマリノ村に含まれていた。このうちガンタラン、ウジュン・ボリ、ルムバン・パナイの3集落が、1992年10月24日よりガンタラン村として独立した。マリノ村として残ったのはマリノ集落、バトゥ・ラピシ集落の2つである。1989年時点でのマリノ村の人口は7,189、うち現在ガンタラン村となった3集落の人口は2,268であった。そこで、プロジェクト対象地（現ガンタラン村全域、及びマリノ村バトゥ・ラピシ集落）に限定して当時の人口密度を計算してみると82人/km²となり、やはり焼畑農業で支えられる人口密度をはるかに超えていることがわかる。

2. 社会階層

(1) 伝統的身分制度

一般的に、マカッサル人の社会には王族層、平民層、奴隷層という3つの基本的な社会層が存在した [マトウラダ 1980] と言われているが、ガンタラン地域の場合、5つの社会層に分かれる。第1はカラエン (karaeng) と呼ばれる王族層で、第2はダエン (daeng) と呼ばれる上級貴族層である。第3はプト (puto) と呼ばれる下級貴族層で、子供が多いときなどカラエンやダエンの家に世話になり雑務を手伝うことが多かったらしい。第4はタウ・サマラ (tau samara) 或いはカカ (kaka) と呼ばれる一般大衆層で、居住地は集落の中心から離れた場所に散在し、斜面での焼畑移動耕作によって生計を維持していた。そして第5はアタ (ata) と呼ば

れる下人層で、王族・貴族層のための薪集めや水汲みを強制された。カラエンの娘が他の地域へ嫁ぐ場合、その地位を証明するために一緒に連れて行かれたという。²⁾

カラエンやダエンとアタとの間の結婚は、堅く禁じられていた。他の階層間結婚は存在したが、多くは1つか2つ離れた階層までの間の結婚であった。カラエンとダエンとの間の結婚の場合、子供は父方階層に所属することになる。しかし、他のケースの場合の子供の所属階層は、第一子が父方階層、第二子は母方階層、第三子は父方階層、と交互に父母どちらかの階層に属す習わしである。³⁾

もともと水田を所有していたのはカラエンとダエンのみであったが、後に他の階層にも土地を与えて水田開発がなされた。アレンヤシ (*Arenga pinnata*) 群落の所有は、現在でもカラエンとダエンに限られている。水田とアレンヤシ群落の所有を独占することによって富の集積がなされていたのである。

調査対象4集落のうち、カラエンとダエンの出自の人が比較的多いのはJ集落とT集落で、P集落とB集落は主にタウ・サマラとアタを出自とする人で構成されている。

(2) 伝統的統治組織

ガンタラン地域の支配者はカラエン・ガンタランと呼ばれ、通常は長男によって引き継がれる。⁴⁾ 現在、カラエンの子孫はKetua Adatとして慣習法 (pangadakkang) を司っている。次に、水田のある村にはガララン (gallarang) と呼ばれる村長が置かれ、ダエンかプトすなわち貴族層から選ばれた。この村は、現在の行政区ではRWに相当する。村長の下には、サリアン

-
- 2) 昔は、アタのみ呼び捨てにし、他は名前の前に所属階層をつけて呼んだ (例えば, puto INOUE)。しかし、現在では、カラエン及びダエン以外は、呼び捨てにする場合が多い。一方、カラエンとダエンの場合は、結婚を機に、幼名 (arengcadde) のあとにカラエン或いはダエンを冠した元服名 (arenglompo) をつけるのが普通である。例えば、現在のketua adatの名は、Maddo Karaeng Bombongであるが、Maddoは幼名で、カラエン称をつけたBombongが元服名である。とはいえ、カラエンも自らの名にカラエン称をつけずにダエン称をつけたり、また形式的に全ての人に対してダエン称をつけて呼ぶこともある。
 - 3) 家族に関する社会人類学的調査は実施していないが、用語だけ示しておく。夫婦は“sikalabine”と呼ばれ、核家族 (夫婦+未婚の子供) のことは“sipa'anakkang”と呼ばれている。そして、他人や使用人を含む同一の家に住む一つの世帯は“siballa,” 親族は“sipammanakkang”と呼ばれている。
 - 4) ガンタラン地域の王族は、ゴア王国の王族の血を引くと言伝えられているが、現在のカラエンより3世代以上前のカラエンの名を口にすることが禁じられている。もとより文献はなく、このためガンタラン王族の系譜をたどることはできなかった。Patunru [1983] によると、ゴワ王国の国王選考委員会 (Bate-Salapangnga) は、9小国の王たちにより構成されていた。1894年にマリカンアンがゴワ王として選ばれたとき、その契約にサインしたのはオランダ、ゴワ王、そして9小国の王たちであったが、カラエン・ガンタランもそのメンバーとして名を連ねていた。1900年には、カラエン・ガンタランはこの選考委員会メンバーからはずれているが、その原因は不明である。

(sariang) 或いはピナティ (pinati) と呼ばれる連絡係が数名置かれた。ダエンはこの役を避けたがり、通常はプトかカカがサリアンの役を負った。

3. 土地利用

(1) 土地の種類

水田はガルン (galung), 休耕田はクラン (kulang) と呼ばれる。焼畑はアッココ (a'koko) で、それを含む広義の畑はココ (koko) と呼ばれる。ココに対しては先占取得の権利が認められているが、焼畑の場合、永年生作物がなければ占有権が認められず、相続対象ともならないこともある。テラス (bedengbedeng) を設け、柵をめぐらせた常畑は相続の対象となる。焼畑移動耕作の跡地と休耕中の常畑はともにタタカン (tattakkang) と呼ばれる。永年生作物が植えてあっても、下草刈りなどの手入れがなされていなければタタカンと見なされる。

草地はパラン (parang) と呼ばれる。3回くらい焼畑耕作を行うと、その跡地は草地になることが多かったらしいが、もともと草地であった場所も広範に存在するようである。草地に対する占有権は認められていない。草の種類は、かつてレア (*Imperata cylindrica*) とベンロン・ベンロン (*Themeda* sp.) が優占しており、特に山の上部には細い竹のようなオレン・オレン (学名不詳) と呼ばれる草が多かった。ところが、1980年頃からコッパサンダ (*Eupatorium riparium*) が侵入し始め、標高の低い方から次第に他の草を駆逐しつつある。

家の前庭は、パララッケン (parallakkeng) と呼ばれるが、人によっては家の両脇もこれに含める。家の後方はパララッケンには含まれず、プカラガン (pekarangan) と異なる概念であることは明らかである。もっとも、元来彼らの家は畑の中にあり、周囲に果樹を植える習慣もなかった。そのため、マカッサル語にはジャワ語のプカラガンに相当する単語はない。家の周辺に果樹などを植えるようになったのは、集村形態をとるようになってからである。現在、家



写真1 アレン糖の生産

熱した後、ココナッツの型に入れて固める。

に隣接する果樹園を、プカラガンと認識している人もあれば、ココと認識している人もある。

アレンヤシ群落はボロン・インル (borong inru) と呼ばれる。アレンヤシのある集落では、アレンヤシを所有しない人でも所有者に代価を払って（例えば1回の精糖当りアレン糖1玉）、アレン糖の生産を行っており、これが住民の重要な現金所得源となっている。かつては少数のカラエンやダエンがアレンヤシを所有していたが、現在は相続によりカラエンやダエンを出自とする比較的多くの人が所有している。しかし、カラエンやダエンを出自とする人がほとんどいないP集落やB集落では、現在でもアレンヤシ所有者はいない。

森林はロマン (romang) と呼ばれ、焼き畑跡地の大きな二次林や人工林も含まれる。タタカンからロマンへ移行するのは、樹冠が閉鎖した時点という人もいるが人によって見解が異なる。しかし、腕の太さくらいだと明らかにタタカンであり、腰回りくらいの太さなら明らかにロマンと認識される。

（2）ガンタラン地域における土地利用の変遷

この地域の人々にとって、1940年代までは焼畑耕作の重要性が極めて高かった。主要な作物はトウモロコシで、他にキャッサバ、野菜類、豆類などを生産していた。畑と家は、毎年或いは2～3年ごとに移動し、焼き畑跡地のタタカンかパランを休閑期4～10年で繰り返し利用していた。カラエンやダエン層は水田も持っており、焼畑耕作によるトウモロコシは乾季に、水田での稲は雨季にそれぞれ生産することで労働力の配分を行っていた。オランダの撤退後、貴族層による水田開発が活発化し、役畜として水牛が利用された。

1970～80年代になると、タフだが作業能率の悪い水牛よりも、作業能率の高い牛が役畜の主流となった。草原の火入れ（放牧用）及び焼畑農業は、1970年代中頃の州山林局によるメルクシマツ造林の進展とともに減少し始め、1980年代末にはほぼなくなった。この時期、焼畑跡地にバナナ、コーヒー、果樹、を植え始める人も出始めた。

現在では、プロジェクト開始後プカラガンや常畑に盛んに植えられた果樹や永年生作物が生育しつつある。

（3）調査対象集落ごとの歴史と土地利用の変遷

T集落は、初代カラエン・ガンタランの墓を山頂に戴く山の中腹に位置する。この山の稜線は、以前のカラエン・ガンタランの屋敷跡に連なる。かつて、カラエン・ガンタランの屋敷は見晴らしの良い山頂或いは稜線にあり、麓には王族や貴族が居住していたのである。彼らは水田も持っていたが、一般大衆・下人層の人々は焼畑移動耕作を行っていた。1960年代末から、政府の指導によって、現在の場所で集村形態をとり始めた。まず初めにカラエンたちが移動し、他の人々が後に続いた。カラエンの子孫である現在の慣習法長 (ketua adat) もこのT集落に

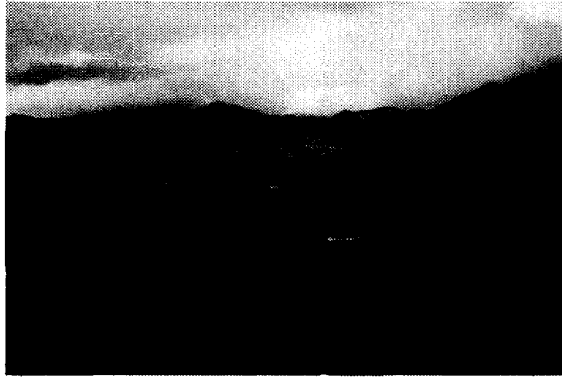


写真2 ガンタラン地域の景観

- ・草地、叢林、水田、アレンヤシ群落、造林地がモザイク状に分布している。
- ・P集落側から対岸のT、J集落を望む。
- ・写真中央やや左寄りの山の頂に初代カラエン・ガンタランの墓がある。

居住している。

J集落の歴史は、1940年代に現在の集落長の祖父とその一族（上層貴族層）による入植・水田開拓で始まる。当初は、現在の集落の中心地に家が一軒（4家族が同居）あったのみである。彼ら一族は水田と焼き畑耕作の両方を行っていたが、他の人々（平民層や下人層）は周辺の傾斜地で焼畑耕作を行っていた。1960年に入り、カハル・ムザカルの内乱⁵⁾に関連する Nurdin Piso の侵入・殺略から人々を守るため、一般大衆・下人層が周辺の森林から呼び寄せられた。彼らは、J集落に隣接する場所に宅地を与えられ、別の集落が形成された。そのため、彼らは焼畑に出作り小屋を設けてトゥモロコシを生産するとともに、自分たちの集落に定住しつつ水田稲作も行うようになった。二期作は1982年以降徐々に導入された。

現在P集落に住んでいる人々は、かつてP集落付近一帯の斜面で焼畑耕作を行いつつ家ごと毎年移動する生活を送っていた。水田を耕す人もいたが、水田の所有者はJ集落の人であった。1940年代中葉に現在の集落長とその一族が、水田の開拓を目的としてJ集落の対岸の急峻な山腹に移動してきたのがP集落の始まりである。とはいえ、集落に定住したのは彼ら一族のみであり、他の人々は相変わらず焼畑耕作を生活の糧にしていた。これらの人々が集落に合流するのは、1970年代中頃の造林以降である。

B集落の住民の多くは、かつて現在のB集落とP集落の間で主に草地を利用して焼畑移動耕作を行っていた。水田を開拓するために、1968年から現在の場所に灌漑水路を作り始め、

5) 抗オランダゲリラを指揮していたカハル・ムザカル (Kahar Muzakkar) は、インドネシア共和国軍に逮捕された部下の釈放と人事問題で要求が通らないことを不服として、1950年に国軍中佐の地位を捨てた。そして、1952年にはインドネシア・イスラム国家の樹立を目指すダフル・イスラム運動のスラウェシ司令官に就任し、激しい武力抵抗を開始したため、南スラウェシの社会不安は1965年まで続いた。

1970年に比較的なだらかな最上流域へ移住してきた人が多い。もともと、集落一帯は草地と石が多いが、焼畑跡地ではなかった。人々は、移住後役畜として牛を飼育し始めた。B集落周辺は、1963年と1977年にメルクシマツの造林がなされたが、畑の火入れによる延焼などのため、集落の周辺に残存するマツはまばらである。もともと草地であった場所のうち、可能なところは全て水田開発を行い、傾斜地は植林地となっているため、現在新しく水田を造れる場所は少ない。

4. 農業の概要

(1) 労働組織

ある人に対する共同労働提供は、“a'kkio'”と呼ばれる。主催者が食事とタバコを準備し、労働提供者は農具（犁一式）と牛とともに参加する。主に、水田の田植え（男女一緒）、収穫（女主体）、畑の耕起、柵作りで適用される。

カラエンの水田稲作のための無償労働提供は、“a'patamba'”と呼ばれ、整地（男）、田植え（男）、収穫（女）に各戸1～2人が一日ずつ参加する。現在、ketua adatがいるT集落では全戸が参加しているが、他の集落からの参加者は少ない。

水田を所有しない人などを対象にして田植えを手伝ってもらう農業賃労働は、“a'saro”と呼ばれる。報酬は、昼食と稲1束である。

一種のゆいである等価労働交換は、“si'bali”と呼ばれる。小グループ内の共同労働もこれに含まれる。通常、1戸当たり1人が参加し、各自が昼食を持参する。

この他、無償労働提供は、“na'bali”或いは“ni'bali”と呼ばれ、労働提供者には昼食が与えられる。尚、自家労働は“a'ttunggaleng”と呼ばれる。

(2) 水田耕作

一筆の水田（galung）が集まって水田の一区画（lompo'）が形成される。lompo'の数は、J集落が4、T集落が6、P集落が1、B集落が7である。

水田耕作権の獲得方策としてまず挙げられるのは、新田開発である。既存の水田の隣接部分の草地か叢林が対象地とされる事が多い。binkungと呼ばれる鍬、linggisiと呼ばれる金梃で平らにしてから、牛でpajekoと呼ばれる犁を引き開田する。この作業は、自家労働及び等価労働交換により実施される。

次に相続（sosorang）である。元来慣習法では、男2対女1の割合で、また同性内では均等に分配された。しかし、現在では同居か否かに関わらず葬儀費用の負担割合に応じて分割されることが多い。この場合、男女の相違はない。

また、小作 (tesang) を通して耕作権を得ることもできる。P 集落と B 集落では、生産物を所有者と小作人で折半するが、T 集落と J 集落では所有者 1 : 小作人 2 の割合で分配する。水田に対する租税は、所有者が支払う場合と小作人が支払う場合とがある。この他、牛馬飼育の小作もあり、所有者と小作者の分益割合は 2 : 1 で、鶏飼育の場合は 1 : 1 を基本とするが、契約によりまちまちである。

他の地域では抵当により水田耕作権を獲得する場合がある [前田 1982]。ガンタラン地域では、債権者と債務者の間で抵当 (ta'gala') の期限は決められておらず、前者は牛や金銭が返却される時まで抵当としての水田耕作権を保有する。したがって、確かに抵当により耕作権は得るが、水田所有権の移転は行われない。

この地域では場所により水田二期作が行われている。“ni'jama bara'” と呼ばれる雨季作と、“ni'jama timuro” と呼ばれる乾季作である。

水田裏作は、“pabu' bulang” と呼ばれる。P 集落ではトマトの水田裏作が重要な現金収入源になっているし、B 集落では水の少ない所で自家用にトウモロコシを植える人もいる。

灌漑水路 (solongang) の維持管理は、関係者全員の等価労働交換を通して行うのが普通であるが、隣組単位の共同奉仕で実施する集落もある。

具体的な作業手順と使用農具及び労働組織について要点のみ説明する。①苗代作りは、主に家族間の等価労働交換によって実施される。牛 (または水牛) で pajeko (犁) を引かせて耕起する作業 (=an'ngalkalu), bingkung (鋤) を用いてテラス斜面の草取りをする作業 (=te'ba'tingkasa), 水を張った後、牛で isara と呼ばれる器具を引かせて土を均す作業 (=an'ngisoi), そして播種 (=a'ngioro/an'ngamboro) と続く。②整地も主に等価労働交換によってなされる。苗代作りと同様に、耕起、草取りが行われ、続いて一回目の代掻き (=nisara, 一回目のことを特に rappasa という), 鋤を用いて畦に土を盛る作業 (=an'ningkasa), そして二回目の代掻き (=二回目のことを特に pakasingara という) と続く。③苗床に播種してから約 1 ~ 1.5 カ月で田植え (=an'nanang/a'tanang) が実施される。等価

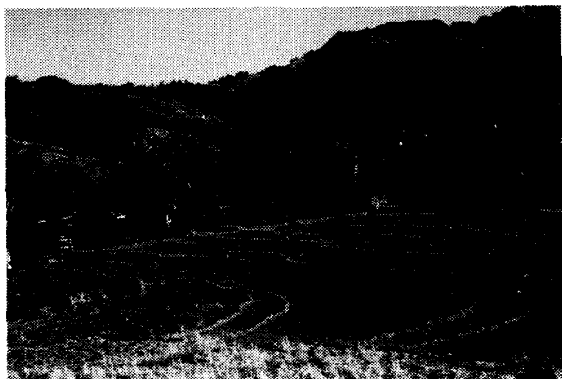


写真3 灌漑水田の景観



写真4 Pajeko を用いての耕起



写真5 Isara を用いての代掻き

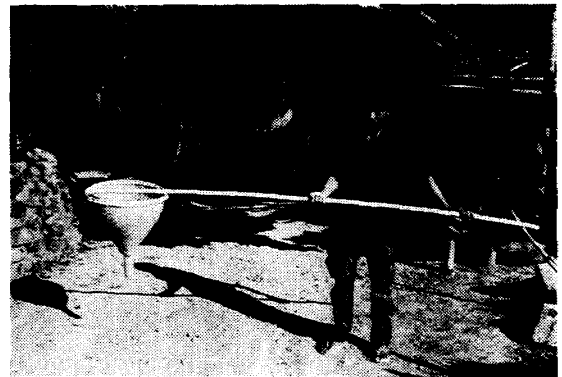


写真6 Munre (虫取り用)

労働交換が主体だが、大面積所有者は農業賃労働も利用する。④田植え後10日くらいしたら、肥料(尿素・石灰)を撒く(=a'pupu')が、この作業は自家労働で行われる。その後、稲が実を付けるまで手で水田の草取り(=a'ruku')が、等価労働交換により行われる。また、kandauと呼ばれる手鋤で畦の草取り(=a'lombairuku')が、等価労働交換によって実施される。そして、稲が実を付け収穫の2週間くらい前になったら、木の樹皮や布で作った虫取り網のような道具を用いて自家労働によって害虫を駆除する(=am'munre')。⑤稲刈りは、まず等価労働交換によって実施され、残りが自家労働か共同作業で行われる。大面積所有者は農業賃労働を利用することもある。稲刈りには、アニアニ(katto)を用いるのが普通であるが、早生・短稈種に限り鎌(sangki)が用いられる。⑥アニアニを用いる稲刈り(=a'katto)の場合、刈った穂先の部分をその場で縛って稲束(basse')を作り、家の天井裏にそのまま保存する。必要に応じて筵の上で天日乾燥させ、素足で脱穀する(=a'lessoro)か、或いは細長い臼(assung)と杵(alu)を用いて脱穀し(=lo'da)、さらに同じ器具を用いて精米する(=a'mali)。鎌を用いる稲刈り(=a'nyangke)の場合、刈った稲がある程度たまと、筵の上に細い丸太或いは角材で小さなテーブル状のものを作り、そこに稲を打ちつけて脱穀する(=a'babbasa)。その後、ナイロンの袋に入れて家に運び、天井裏或いは床に保存する。必要に応じて天日乾燥させ、臼と杵で精米するか、精米所を利用する。精米費用として、11リットルの精米に対して1リットルを支払う。

さて、雨季作の場合、苗代作りは11月初旬から始め、遅くとも2月初旬には整地が終わる。田植えは、早い人は12月中旬から始めるが、遅くとも2月末には終了する。稲刈りの時期は品種により大幅に異なるが、4月中旬から始められ7月初旬には全ての作業が完了する。乾季作の場合、4月初旬から苗代作りを始める人が出始め、7月末には田植えが完了する。そして、9月下旬から12月初旬にかけて稲刈りが行われる。

(3) 牛の飼育

以前は草地を火入れして放牧 (lambara) をしていたが、1975 年の植林を契機に放牧は減少し始めた。治山プロジェクトが開始される頃は火入れはなくなっており、また J 集落を除いて舎飼い (kalawaki) に移行した。舎飼いの場合、早朝牛を bara sapi (木か竹で囲った畜舎で床下に設置することが多い) から出して、水田の収穫跡地 (誰の水田でもよい)、草地、焼畑跡地に連れて行き、夕方また bara sapi に入れる。他の地域からの人による牛泥棒が非常に多いことも、舎飼い形態への移行の原因となっている。

J 集落は水田に囲まれており、しかも約半数の水田で二期作が可能である。したがって、集落の近隣に牛の餌場がない。このため、周辺の山地での放牧が選択されるのであるが、牛泥棒の危険性を気にして、一日一回は自分の牛の頭数を確認する。

(4) 森林利用

ガンタラン地域には森林が殆ど残っていない。かつては、農具を縛るために籐が使用されたが、既に枯渇している。燃材としては、焼畑跡地の小径木の他、アレンヤシやメルクシマツ (造林木) などが使用されている。

5. 土地所有構造：かつての社会階層の反映

(1) 集落間の比較

アレンヤシ群落の所有は J 集落に偏っている (表 1)。T 集落の場合、一部の王族層が今でも大面積のアレンヤシ群落を独占している。

水田は J 集落に集中している。二期作可能水田の割合は、T 集落 (調査対象 40 筆) が 0 %、J 集落 (同 75 筆) が 27 %、P 集落 (同 39 筆) が 20 %、B 集落 (同 42 筆) が 38 % である。二期作が可能かどうかは、灌漑水路の有無によって決まる。T 集落は山の中腹にあり近隣に小川もないので、水路はなく全てが天水田である。P 集落と B 集落も標高は高いが、川があるため、P 集落には 2 本、B 集落には 6 本の水路が建設されている。J 集落に水路は 10 本以上あるが、

表 1 各集落の土地所有構造

集落	調査戸数 (戸)	平均家族 人 数 (人)	核家族割合 (%)	アレンヤシ群落 所有家族割合 (%)	平均所有 水田面積 (アール)	水田小作 戸数割合 (%)	平均牛飼育 頭 数 (頭)
T	20	5.5	50	10	63	50	2
J	19	5.1	42	58	119	11	7
P	18	5.1	72	11	40	6	3
B	17	6.8	59	0	75	18	3

出所：聞き取り調査より。

乾季も水が枯れず二期作に資するのは6本である。

水田小作をしている戸数割合がもっとも多いのはT集落である。これより、T集落には一般大衆・下人層の割合が予想以上に多いことが示唆される。

(2) 各集落内の階層間比較

T集落では、土地所有構造の階層性が明確に表れている。地主層は王族・貴族層が、小作層は後になってから集落に合流した一般大衆・下人層が主体である。

J集落では調査対象全戸が水田を所有しているが、200アール以上の所有者は土地を小作に出し、逆に100アール以下層は他人の土地を小作している(表2)。小作関係はほぼ集落内か或いはT集落との間に限られる。100アール以下層は、金銭か或いは牛を他人に貸した抵当として水田を一時的に保持・耕作しており、所有地、小作地、抵当地を合わせた合計耕作地面積は、結局99アールとなる。100アール以下層は、平均牛所有頭数が8、平均牛小作頭数が2、一戸当り併せて10頭の牛を飼育している。

P集落では調査対象全戸が水田を所有しているが、その面積は小さい。水田面積の大小を除いて、階層間の特徴はないようである。全体的に見てこの集落の特徴は、零細面積の自己所有水田を利用し、雨季は稲作、乾季は稲の二期作か、トマトの裏作を行っていることである。

表2 集落内の階層別土地所有構造

集落および階層	調査戸数 (戸)	アレンヤシ群落 所有家族数 (戸)	水 田				牛	
			所有地 (アール)	小作地 (アール)	抵当地 (アール)	耕作地 (アール)	所 有 (頭)	小 作 (頭)
T 集落	20	2	63	7	3	73	2	0
地 主 層	2	2	225	*125	25	125	7	0
自 作 層	8	0	90	0	0	90	2	0
自小作層	2	0	43	28	0	70	1	0
小 作 層	8	0	0	43	0	43	0	0
J 集落	19	11	119	*24	?	127	6	1
200 a<	3	3	306	*31	?	195	4	3
100 a< < 200 a	6	3	141	*6	6	141	3	0
< 100 a	10	5	50	13	32	99	8	2
P 集落	18	2	40	1	0	40	3	0
50 a<	6	1	68	0	0	68	3	0
< 50 a	12	1	25	2	0	26	3	0
B 集落	17	0	75	6	3	84	2	1
100 a<	6	0	122	0	0	122	4	2
50 a< < 100 a	6	0	69	0	0	69	2	0
< 50 a	5	0	25	21	10	56	2	4

備考：1) 耕作地面積は雨季作の面積である。乾季作は雨季作よりも小さい面積で行う場合がある。

2) 小作地面積のうち、*印は自分の土地を他人が小作している場合で、無印は他人の土地を小作する場合である。

3) T集落は階層分化が比較的明確なので、表のような分類にした。

B 集落では、調査対象のうち一戸のみ水田を所有していなかった。50 アール以下層は、他人の土地を小作することにより、耕作地面積は 50 アールを超えている。

6. 家計構造

(1) 所得

集落毎の一戸当たり平均の年間現金収入（1992 年 6 月～1993 年 5 月の間）のうち、治山プロジェクトにかかわる収入が 30～70% を占めている（図 3）のが特徴である。集落間の比較は後で考察することにし、ここでは各々の集落における階層間の所得を比較する（図 4）。

T 集落では、地主層の所得レベルが極端に高い。彼らは、米と牛の販売、治山プロジェクトでの労働により収入を得ている。これに対して、他の階層ではプロジェクトでの労働、アレン糖の販売が重要となる。

J 集落の 2 ヘクタール以上層の所得は、他の階層の 2 倍である。しかし、治山プロジェクトでの労働収入を除くと、3 階層間の所得水準はほぼ等しくなる。牛、米、アレン糖の販売が安定収入の源である。

P 集落で、50 アール以下層の収入が多いのは、牛の販売による一時的な収入があったからである。所有する牛の頭数が同じであることを考慮すると、牛の販売収入は階層間の所得構造を決める重要な要因ではないと考えられる。したがって、この集落では階層間の差は認められな

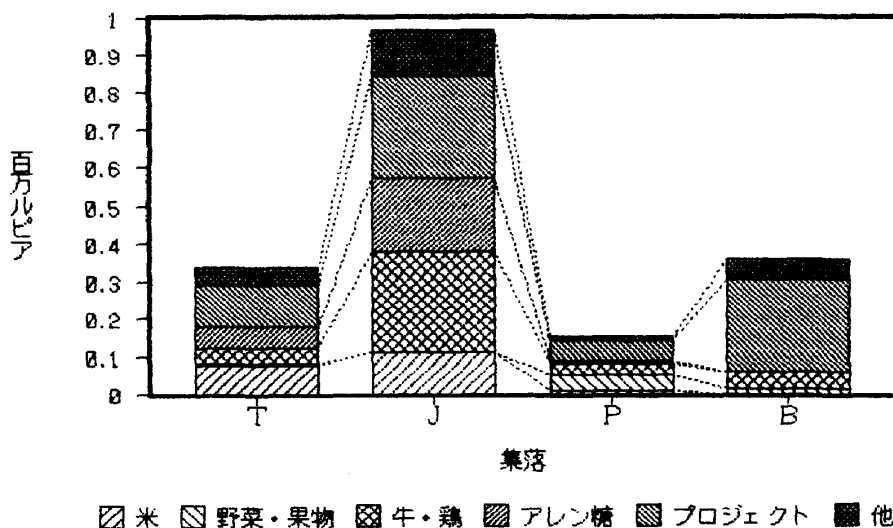


図 3 各集落の一戸当たり平均年間現金収入

備考：「野菜・果物」：T 集落ではバナナ、キャッサバ、コーヒー、P 集落ではトマト、B 集落ではトマト、アボガド、トウガラシ、ナンカ

「その他」：T 集落では Kunit (Curcuma domestica) の採集、発酵キャッサバ、小売り、ベッド作り、J 集落ではアレン糖の仲買い、小売り、家の建築、P 集落では家の建築、B 集落ではシダ類・ラン類の採集、茶園や野菜園での労働

井上：マカッサル人の山村における文化生態系の動態

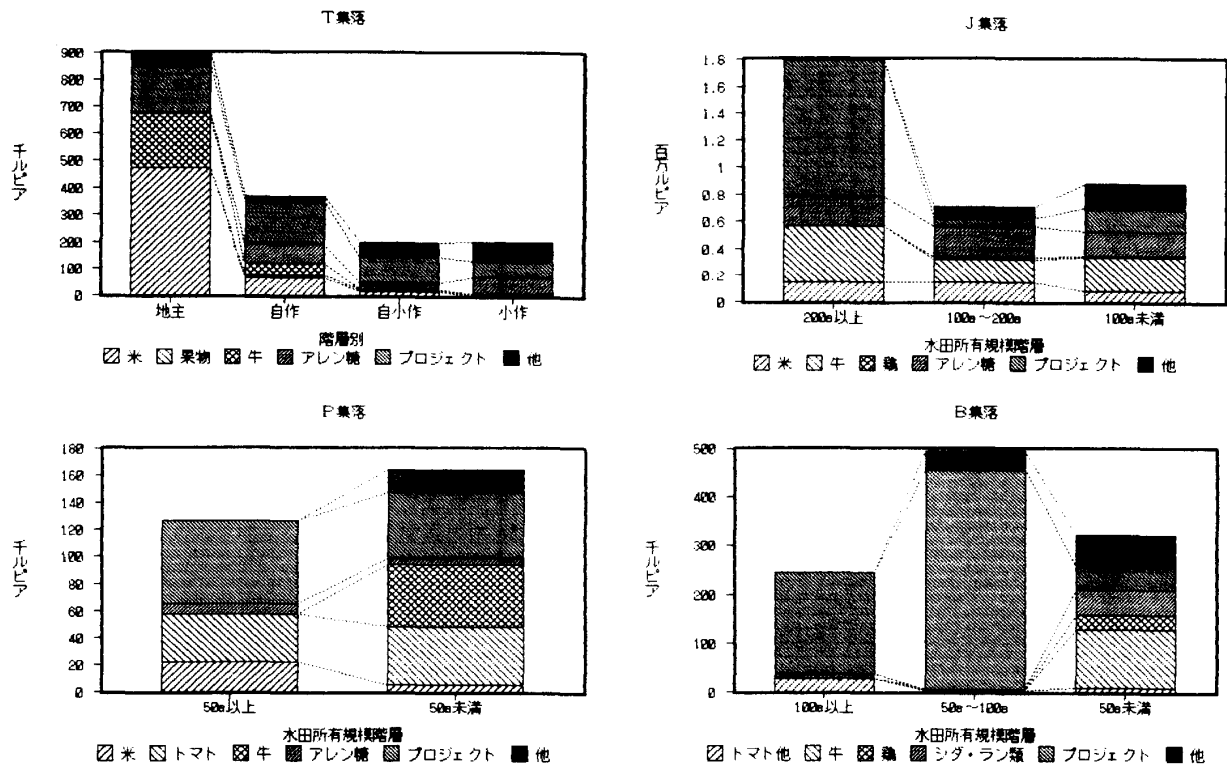


図 4 階層別の一戸当り平均年間現金収入

い。

B 集落で、50 アール以上水田を所有する人々の収入の大部分は治山プロジェクトでの労働収入である。これに対して、50 アール以下層は、収入源の多様化が図られている。

(2) 支出内訳

集落間の支出を比べると、J 集落の人々のみが米を完全自給しており、また水田稲作用の肥料や農薬にそれなりの支出をしていることがわかる。全体的に、50 ~ 68% が食費に充てられている。各集落内の階層間では、消費の差異は認められない。

7. 治山プロジェクトの社会的受容

様々なプロジェクト活動を実施するに当たり、プロジェクト側が住民との協議を十分に行ったため、受け入れは順調になされた。慣習的な所有権の存在しない草地を造林対象地としたことも、土地を巡る住民との衝突が生じなかった原因である。そして、住民の畑跡地（或いは休耕畑）、特に石の柵で囲ってある所が造林対象地となった場合には、住民の理解を得るまで十分な協議が行われたという。

さらに、日本人スタッフ、インドネシア人スタッフ、住民代表の協議を通して、1990 年には

5本/ha, 1991年には20本/ha, 1992年には私有地との境界部に20本/haの割合で、早生樹の造林地の中に果樹（マンゴ、ドリアン、クミリ、ランブータン、ナンカ）を植栽した。この果樹は住民たちの利用に供せられる予定となっている。制度的に確立されたものではなく、住民のうち誰が（どの階層の人々が）利用することになるか不確定であることは確かである。しかし、制度的バックアップなしに、スタッフの努力によって住民のニーズが曲がりなりにも反映されたことは評価に値しよう。

一方でプロジェクトにより収入を得た人々と、そうでない人々との間に潜在的な軋轢が生じているのは否めない。社会問題として顕在化する可能性を秘めているといえる。

IV 考察：環境性と主体性の相互作用

1. 自然環境

荒廃していた水源地帯には、1960年代に州の山林局によるメルクシマツ造林が行われた場所があるが、火入れによる延焼などのため不成績造林地となっている。ところが、1970年代中頃に同様な造林が実施されて以来、焼畑農業及び放牧のための火入れの取締りが強化され、逮捕者もでた。⁶⁾ 森林破壊によって焼畑適地そのものが減少していた折でもあり、プロジェクト開始を前後してこの地域の焼畑農業は見られなくなった。したがって、造林地に対する脅威は、当初から焼畑農業ではなく牛の放牧であった。住民からすると、造林によって縮小されるのは、焼畑用地ではなく牛の放牧地だったのである。

水田雨季作の時期には斜面上部の草地或いは叢林が、牛の放牧地として利用される。ところが、ちょうどこの時期に草地を主体とした治山造林活動が実施されるのである。植栽後4～5年たてば問題ないが、それ以前に牛が入ると造林木が食べられたり倒されたりする被害が生ずる。プロジェクト期間中に治山造林が785ha実施されたが、造林木の約30%は食害を受けている。この障害を解消するためには、牛の舎飼いを促進する必要がある。

2. 技術

1989年以前の人口データは存在しないが、少なくとも先に示したようにプロジェクト開始時には既に人口密度が高く、水田を所有しない下層の人々が焼畑農業に依存して生計を維持することはすこぶる困難な状況にあったことは明らかである。インドネシア独立後のかなり早い時点で人口圧により森林が消失し、それに合わせるように水田が自力で開発されたと考えられる。

6) 前田[1982]の調査でも、1970年代には焼畑禁止が厳しくなったことが報告されている。

そしてさらに、プロジェクト開始とともに、水田稲作と裏作での野菜生産が急速に進展し、プカラガンに果樹木が植栽された。同時に、牛の飼育は放牧形態から舎飼い形態へと移行しつつある。これにより、水田を中心とする土地の集約的利用が必然的に求められるようになったのである。

3. 経済

住民たちは、治山造林、苗畑、林道建設の作業に従事することにより、現金収入が得られたと同時に、道路が整備されたことにより米や野菜類を運ぶのに自動車を利用することが可能となった。ところが先に示したようにプロジェクトによる現金収入の占める割合はあまりにも高い。にもかかわらず、住民たちはプロジェクト期間中に稼ぐだけ稼げればそれでよいと認識しており、終了後の所得低下をそれほど憂慮していない。

一度膨れ上がった家計規模を縮小させるのは、相当な困難が伴うのは明確である。それを知りつつ憂慮なしの態度でいることができるのは、賃労働による現金収入の増加に比べて日常消費支出の増加をかなり低く抑えているためと思われる。収入増加分は、家の新築・増改築、オートバイの購入、牛の購入などに充てられているのである。

4. 社会組織

灌漑水田の開発以前は、流域一帯を見渡せる比較的高いところの天水田を所有していることが、アレンヤシ群落の所有と共に王族及び上層貴族層の証であり富の源泉であった。T 集落が、現在の土地所有構造からしてかなりの階層間格差を抱えつつも、ガンタラン地域の社会的・経済的中心地であったことは間違いない。

ところが、1940 年代に上層貴族層が入植した J 集落は、低地で水の便が良く、灌漑水田が開発された。もちろん水田所有の階層間格差は認められるが、水田所有規模が相対的に大きく、しかも相続により多くの人がアレンヤシ群落を所有している。そのため、経済水準で T 集落を凌ぐようになった。

これに対して、1940 年代以降徐々に形成された P 集落は社会的地位が低いばかりでなく、地形的に水田適地が少ないため経済水準も低いままであった。また、1970 年頃に形成された B 集落も社会的地位の低さを反映して、アレンヤシ群落を所有している人は皆無である。したがって、水田開発の点では P 集落より地形的に有利ではあるものの、やはり社会的・経済的に低い地位に甘んじていた。

さて、治山プロジェクト開始後、昔からの社会階層に規定された形で経済格差が拡大する方向に進むのか、逆に縮小する方向に向かうのかの判断は、現時点では時期早尚である。しかし、変化への兆しを読み取ることはできる。

プロジェクト開始後5年経った調査時点で、集落の一戸当たり平均年間現金収入はやはりJ集落が飛び抜けていたが、B集落が僅かにT集落を凌ぐに至った。ところが、現金収入の内訳を検討すると、治山プロジェクトによる収入を除く現金収入では、相変わらずJ集落、T集落、B及びP集落の順となっているのである。そこで、集落内の階層別収入をみると、T集落では地主層の米販売収入がもともと大きい上にプロジェクトの労賃収入も他の階層より若干多いため階層間の経済格差は拡大したこと、及び地主層の所得がB集落のそれを大きく超えていることがわかる。J集落では水田の大規模所有層がプロジェクトの労賃収入を独占しており、他の階層との経済格差が極端に拡大している。以上より、プロジェクト開始後も出自を基礎とする社会階層は維持されつつ、上層の人々がプロジェクトの経済的利益を手中に収めたと把握することができる。これによる牛への投資などを通して、今後、経済格差拡大・階層分化進展の方向へ向かうことが示唆される。

しかしながら、個別にみると階層分化の進展を打ち消す根拠を挙げることでもある。例えば、階層間格差が認められず全体として経済水準の低いP集落では、プロジェクトにより道路が整備されたため、商品作物としてトマトを主体とする野菜生産を導入した。またB集落では、大・中規模水田所有層がプロジェクトの労賃収入を独占したのに対して、零細所有層は収入源を多様化させている。さらに、昔から上層身分の人が居住し、最も古くに開発されたT集落の水田は今だに天水田であるのに対して、他の集落では灌漑水路の整備によって二期作可能な水田が増えている。これらは、社会的地位の低い階層に属する人々の経済水準向上への可能性、すなわち経済格差縮小を示唆している。

5. 価値観（持続可能な資源利用に限定して）

かつてはガンタラン地域も森林に被われていたはずである。そして、建築用材や農具として利用される樹木や籐の利用に対して、カラエン等の許可がなければ外部の者は伐採できない[前田 1982]というような規制、或いは村落内部での規制が存在していたと思われる。また森林を焼畑用地として伐採する場合に、有用樹種を伐らずに残したことが本調査で確認されている。ところが、焼畑農業が禁止されていたのはアレンヤシ群落のある場所だけであった。また、焼畑用地の循環利用に関する慣習らしきものも発達していなかった。したがって、持続的な森林利用の対象は有用樹種に限られていたことになる。

プロジェクト開始時点では既に利用価値のある樹種自体がほぼなくなっており、その利用に関する規制は消滅していた。この原因としては、内乱による慣習法の崩壊が考えられる。或いは、有用樹種がもともと掟というほど強い規制というよりも、むしろ緩やかな習慣のもとで利用されていたに過ぎない可能性もある。

次に、プロジェクトによる治山造林地が比較的順調に生育している原因を考察する。既に述

べたように、かつてのメルクシマツ造林地のように火災を被らないのは、焼畑農業及び放牧のための火入れがほぼなくなっているためである。また、造林木が故意に伐採され薪として利用されないのはプロジェクト側と住民との協議を通してプロジェクト事業が受容されたからである。しかし、プロジェクトによる雇用機会の創出という経済効果が、住民の意志決定に与えた影響は絶大なものがある。住民たちは、長期的な視点から森林保全の必要性を認めたからというよりは、むしろプロジェクト期間中の経済的利益のためにプロジェクトに協調する態度をとっているといえる。

このように考えると、造林地に牛を放牧することも、かつての造林地であるメルクシマツを薪として利用していることも説明がつく。結局、プロジェクトによって、森林利用にかかわる新たな規範が持ち込まれ、定着したとは考えにくい。すなわち、プロジェクト開始後の環境性は価値観にまで及んでいないのである。

V 総括：文化生態系の動態

1. プロジェクト開始前

マカッサル人の居住する内陸山村のガンタラン地域は森林に被われていた。そこでは天水田とアレンヤシ群落を独占し富を集積する上層身分の人々が王宮のある山の麓に定住し、周辺の斜面では一般大衆等が定住せずにトゥモロコシを主産物とする焼畑移動耕作を営んでいた。1940年代以降、灌漑水田適地に入植した上層身分の人々が新たな集落を形成し、そこが次第に経済の中心地として発展した。

一方、緩やかな習慣のもとで利用されていた森林が人口増加と共に激減したため、政府は1960年代にメルクシマツ造林を実施した。しかし、隆盛を保っていた焼畑農業からの延焼などにより造林は失敗した。続いて、政府は水源地域の保全を目的として1970年代中頃に再びメルクシマツの造林を行い、同時に焼畑農業及び放牧のための野焼きを禁止、取締りを強化した。これ以後、焼畑農業と放牧のための野焼きは漸次減少し、一方で一般大衆層も斜面に集まって集落を形成した。

こうして、プロジェクトが開始された1980年代末には焼畑や野焼きはほぼ消滅し、定住化した人々と森林とのつながりもなくなっていた。草地、叢林、アレンヤシ群落、水田、メルクシマツ造林地がモザイク状に広がる景色は、当時の文化生態系をよく表していたのである。

2. プロジェクト開始後

住民たちはプロジェクトによる道路建設を歓迎し、プロジェクト期間中の賃労働による現金収入を見込んだ。一方で、プロジェクトサイドも果樹木の造林及び協議など、住民の協力を得

る努力を惜しまなかった。これらの結果としてプロジェクトと住民との関係は良好に保たれ、造林地が放牧によって被害を受けてはいるものの、次第に舍飼形態が増えつつあり、造林地の保育もかなり成功している。しかし、これは森との関係を回復するという価値観が定着したためではない。住民の目的は収入増にあり、目論見通りプロジェクト作業への賃労働により多大な現金収入を得ることになった。伝統的社会階層別にみて、この収入が上層の人々に独占されたという点ではプロジェクトが階層分化進展の契機となる可能性が示唆される。しかし、一般大衆層など下層の人々が新たな多様な収入源を獲得した点からは、プロジェクト終了後の経済格差の縮小が示唆される。

いずれにせよ、プロジェクトによりガンタラン地域の自然環境、及び文化のうちの技術的側面と経済的側面は明らかにその変容が促進され、文化の社会組織的側面は変化の兆しが見られるようになった。一方、主体性の変化は、景色の変化、すなわち早生樹の造林地及び果樹園の増加、として表出し始めている。しかし、最も社会に深くくいこんだ価値観・世界観としての文化はほとんど影響を受けていない、すなわち環境性は価値観まで至っていないことが示された。

お わ り に

文化の社会組織的側面の変容をより明確に捉えるため、また環境性が価値観まで及ぶ可能性があるか否かを把握するため、数年後に追跡調査を実施する予定である。

参 考 文 献

- 掛谷 誠. 1994. 「環境の社会化の諸相」『環境の社会化——生存の自然認識』(講座地球に生きる2) 掛谷 誠(編), 3-15 ページ所収. 東京: 雄山閣.
- 川喜田二郎. 1989. 「環境と文化」『人間社会系』(環境科学Ⅱ) 河村武; 高原榮重(編), 1-33 ページ所収. 東京: 朝倉書店.
- Khaleque, T. M. Kibriaul. 1992. People, Forests and Tenure: The Process of Land and Tree Tenure Change among the Garo of Madhupur Garh Forest, Bangladesh. A Dissertation submitted to Michigan State University in partial fulfillment of the requirements for the degree of Doctor of Philosophy. Michigan: A Bell & Howell Company.
- 国際協力事業団. 1988. 『インドネシア南スラウェシ治山計画事前調査団報告書』東京: 国際協力事業団.
- 前田成文. 1982. 「生活環境と社会組織: 南スラウェシの一山村誌」『東南アジア研究』20(1): 114-137.
- マトゥラダ. 1980. 「ブギス=マカッサルの文化」『インドネシアの諸民族と文化』クンチャラニングラット(編) 加藤剛; 土屋健治; 白石隆(訳), 316-339 ページ所収. 東京: めこん.
- 荻野和彦. 1993. 「地域と生態環境」『総合的地域研究』創刊準備号: 8-10.
- Patunru, Abd. Razak Daeng. 1983. *Sejarah Gowa*. Ujung Pandang: Yayasan Kebudayaan Sulawesi Selatan.